

2014年5月

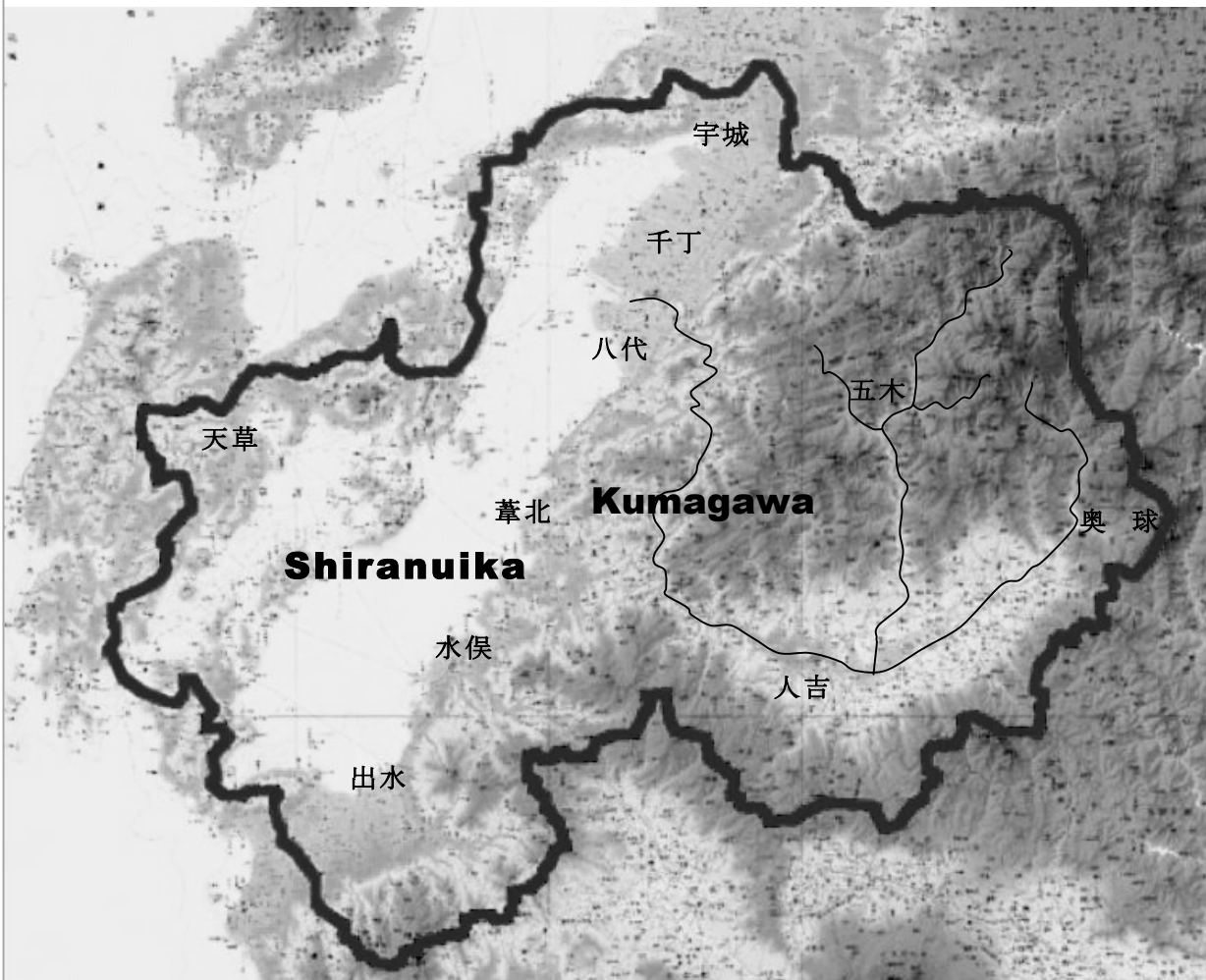
不知火海・球磨川流域圏学会ニュース

らぬいま

第16号

内容

- 平成26年度総会・研究発表会案内
- 現地見学会報告
- 日本一の地下水都市／熊本市
- イグサ被害から見える農薬の怖さ
- 【流域いろいろ】球磨川に触れた沖縄疎開学童
(与那原国民学校を事例として)
- 八代海岸の地名④
麓(ふもと)と古麓(ふるふもと)
- 多良木町の扇状地の災害地名と夜叉五倍子
(ヤシャブシ)
- 学会誌原稿募集
- 「不知火海・球磨川流域圏学会誌」販売



TEL&FAX : **0964-26-2003**

事務局

熊本県熊本市南区城南町東阿高1136-6

2014 年度大会のご案内

平成 26 年 5 月 31 日(土)～6 月 1 日(日)

■日時及び会場

平成 26 年 5 月 31 日 (土)

- ・総会 人吉市中小企業大学 中会議室 (40 名) 時間：13 時
- ・研究発表会 同大会議室 (80 名) 時間：14 時 30 分～18 時

平成 26 年 6 月 1 日 (日) 現地見学会

■研究発表会

基調講演：木崎康弘氏「人吉・球磨のおもしろ考古学」

研究発表会

- ① 八代海からアメリカに渡ったカキ「クマモト・オイスター」の過去、現在、未来
永田大生 (熊本県水産研究センター研究員)
- ② 球磨川流域の管理方法ー江戸時代ー 上村雄一 (豊かな球磨川をとりもどす会共同代表)
- ③ 深水湿原の保全について 宮川統 (環境省希少野生動植物主保存推進員)
- ④ ヒジキ増殖手法の確立と普及に向けた取り組み 長山公紀 (熊本県水産研究センター研究参事)
- ⑤ 定水深浮遊体を用いた潮汐流の垂直分布計測の試み 入江博樹 (熊本高専八代キャンパス教授)
- ⑥ 人吉球磨の世間遺産 久保田貴紀 (かちやあデザイン一級建築士事務所)

■現地見学会

- ・タイトル：人吉地域の歴史と自然を観る
- ・日時：6 月 1 日 (日) 午前 10 時～午後 3 時
- ・集合場所：人吉市中河原公園
 - ・内容案：中河原公園 ⇒ 深水湿原 (相良村) ⇒ 雨宮神社 (相良村) ⇒ ツクシイバラ自生地 (錦町) ⇒ 願成寺 (人吉市内) ⇒ 昼食 (人吉市内「田」) ⇒ 中河原公園 → (徒歩) → 人吉大橋 → 瀬原観音 → 水の手橋 → 人吉城跡 → 人吉城歴史館 → 織月酒蔵 焼酎蔵 → 中河原公園 (解散) → (オプション) 人吉層
- ・参加費：2000 円 (昼食代・ガソリン代)



↑ ツクシイバラ自生地

■懇親会

- ・日時：5 月 31 日 (土) 時間：午後 7 時 30 分
- ・場所：中小企業大学レストラン
- ・参加費：3500 円

■宿泊：中小企業大学 2500 円 (1 泊)



↑ (会場) 中小企業大学校 人吉

現地見学会「出水の武家屋敷と米ノ津川流域を観る」報告

つる 詳子

米ノ津川流域は、薩摩と肥後の境にある出水市を流れています。豊かな自然と歴史の町として知られ、薩摩の関所の町として栄えた出水市には出水武家屋敷や、宝永~享保時代に薩摩藩によって整備された、20キロにわたる五万石溝の遺跡、また、下流の平野部には、ツルの飛来地があり、ツルに関連した施設も整備されています。今回の現地見学会では、出水平野を中心として、米ノ津川流域の自然と歴史に学びました。

この見学会の実施のために、事前の準備や当日の案内まで、お骨折り頂いた溝口文雄氏と担当者の溝口隼平氏に、改めて感謝の意を述べさせていただき、以下報告いたします。

日時：平成 25 年 10 月 6 日（日）

集合場所：出水駅 SL 前

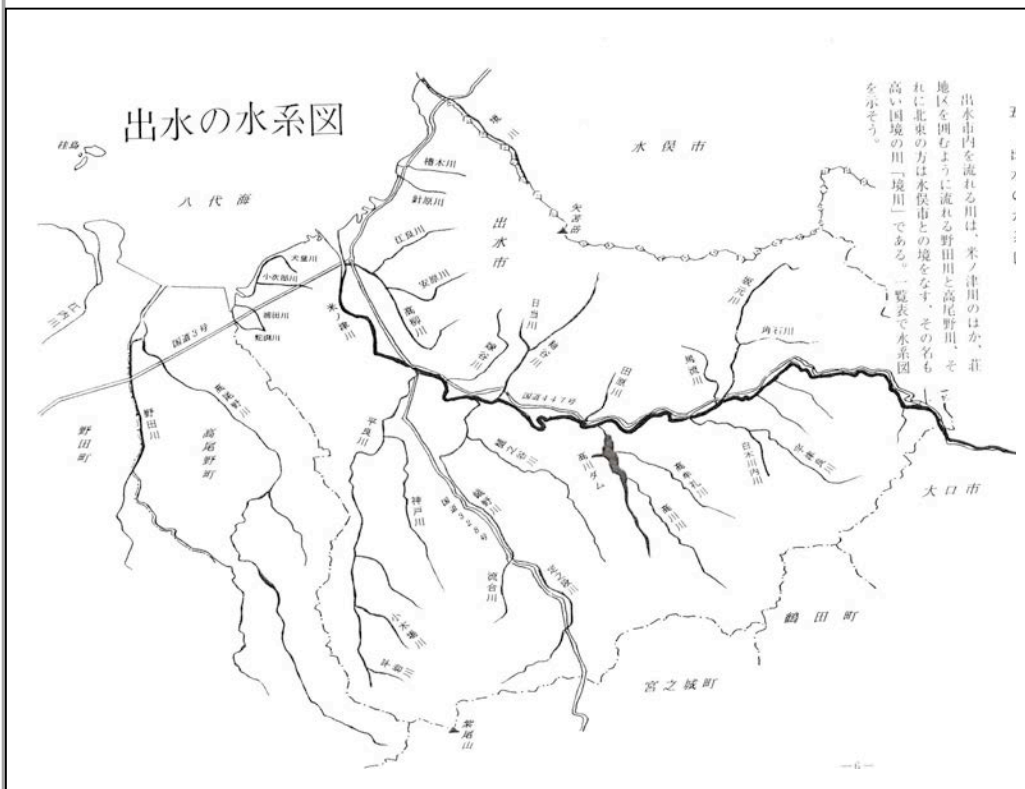
時間：午前 9 時 20 分（集合）～午後 3 時 30 分

コース：出水駅（集合）→東光山（出水平野一望）→五万石溝取水口→五万石溝遺構・水路跡地→（昼食）
→御仮屋門・武家屋敷郡・散策→河口域→出水平野・クレインパーク→出水駅（解散）

参加者：12 名、参加費：2000 円（車代・昼食代・入館料等含め）

案内及び説明：溝口文雄氏（出水市在住）

当日は、時間に集合すると、車数台に分乗してすぐ出発。まず、出水平野全体が見渡せる東光山展望台まで行く。天候にも恵まれ、出水平野から、不知火海と不知火海を囲む長島、天草下島の山々、獅子島等



出水市内を流れる川は、東から米ノ津川・高尾野川・野田川があり、米ノ津川は矢筈・紫尾山塊に、高尾野川・野田川は、紫尾山塊に源を發し、西流ないし北流して不知火海に注いでいる。

←当日配布資料から

が見渡せる。市域の大半は扇状地であり、米ノ津川とその支流の平良川、高尾野川、野田川がそれぞれ北西流して八代海（不知火海）に注いでいる。この日は台風も近づいているとあって、不知火海には、大型船数隻が避難していた。

ここで、その日一日を案内して下さる溝口文男氏から、出水平野の成り立ちや水の流れやその利用について説明を受ける。米ノ津川は大口市との境界付近に源を發し、出水市街地を通過して八代海に注ぐ二級河川で、下流部は河岸段丘が發達しており、洪積台地を形成している。そのために、広い出水平野の水田に水を引くことができず、宝永もしくは享保時代に、藩主島津吉貴公の命により五万石溝の大事業が着工されたとのこと。

説明を受けた後に、その五万石溝取水口に移動し、水路跡地などの五万石遺跡を観る。五万石溝は、同水系の広瀬川の水を大川内下平野で取水し、出水市南部の山腹を迂回させ、約5千分の1の勾配で大野原沖積台地に引き入れて、米ノ津海岸に流すという、実に20kmに及ぶ大水路であった。相当の難工事であったことが予想される。完成したものの、その後の維持管理は費用及び労働力の面からも、その機能以上に農民にとっての負担が大きかったようである。しかし、何度も補修改善を繰り返しつつ、近年まで利用されてきたが、高川ダムの完成で、250年にも及んだ五万石溝はその役目を終えた。

現存している水路の一部を見学する。見学が終わりかけたところに、溝口氏が「この辺りはヒルがいるので注意して下さい」と注意を促すが、時すでに遅しで、犠牲者若干名に及ぶ。

出水市に戻る途中に、現在出水市に水を供給している高川ダムとシラス層が露出している採石場を見学する。

市内に戻り、美味しい“づけ丼”と食べさせてくれるというので、予約していたお店「桜勘」に行く。メニューを見るとどれもこれも美味しそうで、みんな迷いながらの注文となった。特にカンパチの定食を煮付けにするか塩焼きにするかで迷っていたようだ。ところが、空腹な上に、美味しそうな匂いの中、待てども待てども出てこない。確かに人気のお店のように、お店は満杯であったが、とうとう外を散歩する人も出てきた。私もお店の真ん前にある、日本で一番大きなお地蔵さんで有名だという八坂神社に詣でた。台座まで含める



↑東光山展望からの眺望。出水平野と八代海が見渡せる



↑五万石溝導水路跡



↑武家屋敷群の家々の、塀や石垣などが統一された外観



↑「田添邸」で武家屋敷群についてのお話を聞く

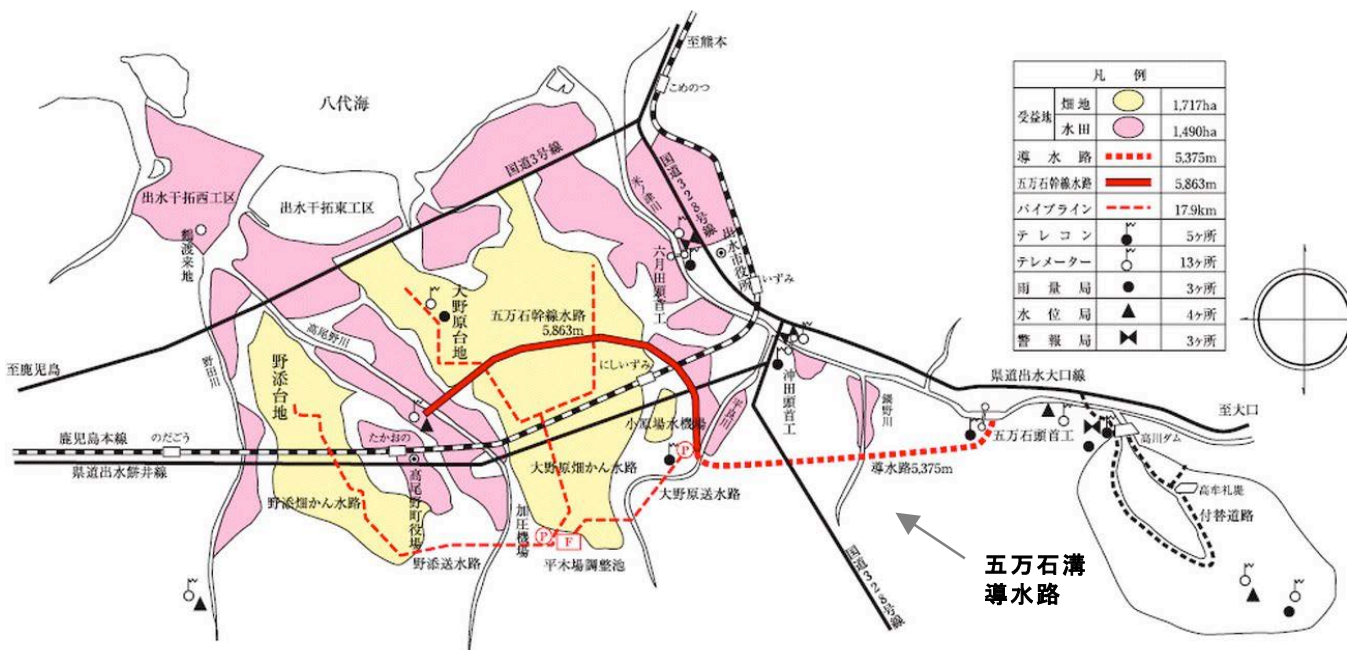
と高さ 4.15 m、確かにデカイ。ご利益も倍あることを願いつつ、手を合わせた。お店に戻って、やはりしばらく待たされた後、漸く昼食にありつけたが、待たされたせいもあってか、とても美味しくいただけました。

昼食が午後の予定に大きくずれ込んだため、午後からの見学はバタバタになりそうだと、予定していた武家屋敷群を車でざっと一周りして、いくつかの武家屋敷を見学することにした。この武家屋敷群には現在も人が住んでいるところも多いが、見学可能な武家屋敷には地元のボランティア(?)の説明者が待機していて、丁寧に説明してくれる。

1軒目の田添邸は、部屋数は10以上もあるような大きな屋敷だ。客人と家人が入る入口があり、どちらから入ったか忘れたが、広間、仏間と抜け次の間で詳しい説明を聞く。鹿児島島の武家制度から、出水兵児修養掟など武士の教育方法、戦争へ対応するための日頃からの工夫等々・・・時間がオーバーするのを気にしながらのご講義ではあったが、初めて聞くお話は面白かった。その後屋敷内の他の部屋を見学する。時間は過ぎていたが、もう一屋敷は見学したいというので、隣の税所邸に行く。

ここでは講義というより、この屋敷ならではの特徴を、説明者が面白く解説してくれた。一つ目は、屋敷内に弓の練習場があることである。一つの部屋の一部が隣の細長い部屋と続いていて、その先に的がかけてあり、雨の日にはここで練習したとのこと。二つ目は、囲炉裏の横の板が取り外せるようになっていて、敵が侵入してきたら、ここを開け、まず女・子供が先にここから床下を通して、外に逃げたという。三つ目は屋根裏の隠し部屋である。梯子をかけて登れるようになっているので、登らせてもらった。また、この屋敷には、戦国時代の鎧や兜を含め、いろんな衣装がおいてあり、それを羽織ると写真を撮ってくれるというサービス(多分、有償だったと思う)があり、上淵さんが鎧・兜の武者姿に返信、カメラに収まった。武家屋敷群は、もう少し時間をかけて散策したいところだった。

その後、やはり米ノ津川の河口も見たいと河口へ車を走らせる。河口につくとポツポツ雨が降りだ



「出水平野地区受益面積」(農水省作成資料から)

したので、ここは早々に引き上げ、最後の目的地であるクレインパークに向かう。

クレインパーク（出水市ツル博物館クレインパークいずみ）は、ツルの渡来地とは離れた出水市文化町にある。広い園内には、遠くからでも目立つ円錐形をした博物館とその周りに、広い芝生広場や野鳥公園、巨石を配置した四季の庭などがあり、ジョギングを楽しんでいる人もいた。ここでは、ツルの生態や世界中のツルの紹介、またツルと人との関わりに関する展示がしてある。ツルの剥製や様々な展示品、映像が見られる大スクリーン等が、ゆったりとした空間にセンスよくレイアウトしてある。勉強するつもりでゆっくり見れば、1時間では足りないかもしれないが、遠方からの参加者もあり、足早の見学となった。それにしても、ツルの渡来地の近くにあるツル観察センターの傍に建設すれば、もっと来館者も増えただろうと思いつつ、博物館玄関前での記念写真に収まった。

この学会では、不知火海に注ぎ込む幾つもの河川の流域をこれまで見学してきた。同じ熊本県内であっても、それぞれの流域には、それぞれの河川形態と共にそれぞれの自然や文化、歴史があり、この見学会はとても勉強になる。今回の米ノ津流域の見学会も盛りだくさんの実り多い見学会となった。

出兵平児修養掟

薩摩の代々の藩主たちは「薩摩を守るのは城ではなく人である」と考え、国防の重点を士民の訓育におきました。教育の方法は各郷中で独特のものが工夫され、各自が日常で守るべき規約を決めていました。この規約に従って山登りや水練、剣術などの訓練に励みました。

「兵児」とは、6~7歳から30歳までの青少年のことで、年齢によって「兵児山」「兵児二才」「中老」の区分がありました。

（当日配布資料から）

出水兵児修養掟

士ハ節義を嗜み申すべく他
節義の嗜みと申すものは口に偽りを
言とす身は私を構えず心直るて
作法乱す礼儀正しく上は諂ら
ず下を侮らば人の患難見
捨てす己か約諾を違へず甲斐
しく頼母しく苟且すも下様の賤し
物語り悪口なと話の端にも生さず
恥我知りて首創わらば己を為す
申す事我せし死生一途を一足も
引かず其心鉄石れ如く又温和慈愛
まして物の哀れを生り人に情ある我
以て節義の嗜みと申すもの也

耕心道人云



↑クレインパークの広い展示スペース



↑クレインパークの前で（最後まで参加した人たちのみ）

日本一の地下水都市/熊本市

大和田 紘一（東京大学名誉教授・熊本県立大学名誉教授 不知火海・球磨川流域圏学会会長）

阿蘇に降った雨は10数万年前の阿蘇山の大噴火による火砕流堆積物の厚い層によってしっかりと濾過されて、地下の大きな水瓶に蓄えられ、本物の mineral water になって、約20年間をかけて熊本市内の多くの場所に湧水して来ると言われています。この地下水が熊本市近郊の住民に供給されているのです。我が国の人口50万人以上の都市で浄水場を経ずにこのように地下水を直接供給している場所がないことから、熊本市が日本一の地下水都市と呼ばれる所以なのです。このすばらしい水の循環システムは、加藤清正や、その後の細川藩によって作られてきたと言われています。熊本市内には憩いの場所としてとても良い江津湖があります。その付近は、かつては一面が阿蘇からの地下水のわき出す湿地だったのを、加藤清正が、緑川との間に江津塘*（えづども）を作ったので、現在の上江津湖と下江津湖が形成されることになり、緑川との間には広大な田畑ができたと言われています。この江津塘は田畑を増やすことになって地域の農業生産に貢献してきたのです。加藤清正が熊本に入城してから行った土木事業は熊本城の築城を初め、沢山あります。後を継いだ細川藩でも、水源の管理など沢山のことが行われてきました。この結果が評価されて、熊本市が2013国連生命（いのち）の水最優秀賞を受賞しているのです。

熊本市では、水の大事さを市民が知り、節水に努めて欲しいことから、数年前にくまもと水検定試験が行われるようになりました。私は昨年に市制日よりこのことを知ったので、まずは3級に挑戦し、その後には2級の認定証を頂きました。地下水の水質に関する内容だけの設問であれば、私は少なくともこれまでに海水の水質に関する勉強をしてきているのでそれほど問題はないのですが、水源の位置や、清正公が行った事業などについても問題が沢山出るので、熊本に育っていない私には本当に難しいのです。熊本市は、くまもと水検定公式テキストブックを刊行していて、これが本当に頼りになるのです。テキストブックを読んで、地図を頼りに水源に関係のある場所には出かけているのです。2級と3級の試験は4択問題で、50問が出題され70点を取れば合格なのですが、1級になると、4択問題ではなく、記述式も入ってきて、合格は80点になります。今年は1級の認定に向けて、がんばりたいと考えているところです。今は3年前に大学を退職して、年金を受けながらの自由生活ですが、時間を見つけては、図書館に通って、ぼけ防止を兼ねながら、テキストブックの勉強をしています。熊本で育っていない者にとって本当に難しい例を挙げると例えば、八景水谷という市民では誰でも知っている、水源として大事な場所が市内にありますが、はじめはとてつ読めません。実は、はけのみやと読むのです。

最近東京に行ったときに、熊本の水の美味しさを実感することがありました。レストランで昼食時に、出された水を口に含んだときに大きな違和感を覚えたのです。頭につんとくる刺激を感じてしまいました。多分浄水場で消毒のために入れたカルキだったのでしょう。10数年前に東京に住んでいた頃はまったく感じなかった刺激でした。熊本市に住んで13年間にもなると、本物の mineral water に完全になじんでしまった結果なのですね。かつて初めて熊本に着任したときには、うがいのために水道水を口に含んだときに、とても美味しいということを感じたことが思い出されてきます。日本一の地下水都市の恩恵を受けつつ、普段は美味しい水が当たり前になってきているのです。

最後に、本文に書いた内容は、熊本市発行の水検定公式テキストブックからお借りして紹介をさせていただいたこととお断りさせていただきます。

*塘 土手あるいは堤の意味

私はイグサと米作りを生業としている農家です。私が子供の頃の事を思い返すと、小学低学年までは殆ど農薬は使われていなかったのでしょうか、田んぼの脇の小さな水路にドジョウがいっぱいいて、それを竹で作った箒で掬って捕まえたり（ドジョウ掬いの踊りそのまま）、大きな水路では竹の先に杓子を括り付けて深さ1メートル余りの所のタニシを掬って集めて、売りに行き小遣いにしていました。石垣のあるところには竹の先に曲げた針金の先に餌をつけ、隙間にいるドンコやウナギを釣り、秋の稲刈り後には、集落内の川はいくつかの場所に区切って入札によって魚を取る権利が売られて、買った人は堰を作り、水を止め、水を汲み出して魚を捕えていました。大きな魚を取った後は近所の子供たちが魚を追い回して捕まえていました。手づかみする感覚はいつまでも残っています。夏になると近くの堰で泳いでいました。堰は、当時は広いと思っていたのですが、大人になってみるとすごく狭かった事がわかります。高学年になった頃イグサの面積も増え、稲の殺虫剤が普及し始め、知識の少ない農民はマスクもせず、肌が露出したまま散布をして農薬中毒になり亡くなる事例が多発したこともあり、農薬散布時期には川での遊泳禁止になりました。それから川の魚や田んぼの生き物が少なくなりました。私がイグサ作りを始めた頃もイグサの除草剤による魚族に被害があった事がありましたが、徐々に農薬の種類が変わってきて、目に見えるような影響はなくなりました。イグサの根は稲に比較して非常に弱く回復も遅いので、使う農薬には気を遣うし種類も限られています。そんな中、今回の事件はイグサ作り44年にして初めての経験であり改めて農薬の怖さを体験しました。

イグサは11月から12月にかけて植えつけ7月頃刈取ります。寒い時期は短く根を張り、温かくなったら伸び始めます。その年は寒い時期は平年並みの生育だったのが、伸び始める4月に被害が出始め先端が赤くなり、根を抜くと黒くなり傷んでいました。被害が目立ち始めた2012年5月11日の地元新聞で報道されました。原因は2011年から販売された水稻育苗箱用の殺虫・殺菌剤ツインターボフェルテラ箱粒剤成分（イソチアズール系殺菌剤、ネオニコチド系殺虫剤、アントラニリックジアミド系殺菌剤）効果（いもち病、白葉枯れ病、ウンカ、ヨコバイ、コブノメイガ等）

本田に植えつけ時に育苗箱に直接まいて植えつけ、2か月間位効果が持続するといわれるので、省力化に寄与するものです。被害農家は109戸、被害面積110ha（生産農家600戸、面積800ha）と被害の大きさは深刻なものでした。成分の中のイソチアズール殺菌剤（イソチアニル）が原因とされました。でも殺菌剤がなぜイグサの根を痛めるのか、それも前年の7月頃に水稻に使った農薬が、冬の間は順調に生育していたイグサに、春になってなぜ被害が出たのか？私たち農家にとっては予想できないものでした。稲の除草剤は、たくさんの種類があります。初期除草剤、後期除草剤、稲以外の選択制の高いもの、効果期間の長短、散布の形態（粒剤、液剤、パック剤、投げ込み剤）等ありますが、稲の除草剤の期間の長いものや、選択制の高いものはこれまでも裏作のイグサに被害があり、注意したり、使用を避けたりしていました。

ところが今回の成分は殺菌剤でした。研究機関の報告では、植えつけ時に田んぼに落ちたイソチアニルと稲わらに含まれるイソチアニルが低温時には溶出せず地温の上昇と共に稲藁分解に伴って溶出して土壌

中で分解され、異なる化合物となり障害を起こした可能性があるといっています。農協の説明ではイグサ及びイグサ田土壌からは残留農薬分析では検出されていないにも関わらず被害が出ています。イソチアニルは玄米への残留値は低いとされていますが、藁には高い残留値を示し、水中での分解は暗黒状態では半減まで最長約3年程かかるといわれていますので、残留の影響はかなり長い年数になります。被害農薬を販売した農協は被害との因果関係を認め、8月までに10 a当たり20万円の補償をしたうえで被害農地は3年間ほど影響がある可能性があるとして作付を控えるよう指導しました。

今回の事によって、最近食品の安全証明に残留農薬の表示がされていますが、(検出限界は0.01 mg/kgです)検出限界以下でもかなりの影響が排除されない事がわかりました。農薬を使う私達にも危険性があり、栽培にも影響を受け、できた作物にも安全性に疑問が生じる事になりますます注意が必要になります。大規模農家になる程省力化のために、効果が長い農薬を使う人も多くなりますし、自家用のキャベツ等は虫に食われて取るのが大変なのに、近くのキャベツ畑ではまったく虫が来ないので、聞いてみると植えつけ時に2か月間効果がある農薬を使っていると聞いて納得した事があります。農薬は効果の表示期間で無くなる訳ではありませんので、もちろん短期間のものでも残留します。

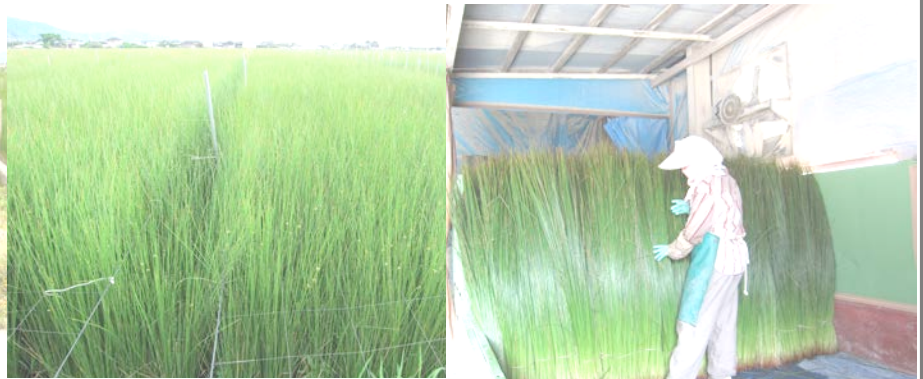
私は自給率が高、50%以上を無農薬か、それに近い栽培したものを食べていますし、外国産はできるだけ避けています。生産者は無意味に農薬を使う事はしませんが、販売する以上は綺麗なものを安く作る事に努力をして規制された範囲で使うのは止むを得ないと思いますが、消費者の立場からすると、食品が基準の範囲内であっても、安全を約束したものではありません。本当に安心な食べ物は、自分で作るか、信頼する生産者にお願いするしかないと思うのですが、そんな生産者は減るばかりです。

イグサの影響はなかったのですが、ネオニコチノ系殺虫剤は、蜜蜂の大量死の原因とされています。蜜蜂は稲の花から蜜を集めると聞いてびっくりした事があります。また最近の研究で子供の脳の発達に影響が心配されていますし、女性ホルモンに似たもので、子宮内膜症などを引き起こす可能性があるとも報告されています。

イグサの生産



(被害イグサ)



(正常なイグサ)

はじめに

縁あって沖縄で暮らし始めて、はや2年半。

出身地が熊本だと伝えると、こちらのオジイ、オバア（沖縄方言でおじいさん、おばあさん）から太平洋戦争中、自身や身内が学童集団疎開で、宮崎、熊本、大分に疎開していたという話をしばしば聞く。なかには球磨川の思い出を語る方などもおり、意外な接点に驚かされることがある。ここでは当時、熊本県八代市へ疎開し、球磨川と触れ合う経験を持った疎開校のひとつである「与那原（よなばる）国民学校」（沖縄県島尻郡与那原町）を例に、沖縄の学童集団疎開の背景や、受け入れ先での生活について追ってみた。

九州三県への疎開

「あるとき、日本三大急流の球磨川を川向かいの今泉部落まで泳いだ。与那原の荒波で鍛えられ、中城湾を箱庭のように遊んだ与那原海洋少年団の一人として、意地（栄養失調気味でやせてはいたが）を見せて泳いだ」¹

これは当時、与那原国民学校・初等科6年だった学童が書いた手記の一部だが、今泉は現在の八代市坂本町、肥薩線・段駅の近く。一方、中城（なかぐすく）湾は沖縄本島の南東部、水深の浅いサンゴ礁が発達し、沖縄らしいコバルトブルーのグラデーションが美しい湾であり、その南側に接するのが与那原町である。

沖縄には流れのはやい大きな河川がないため、手記の学童は球磨川を泳ぎきるのに相当苦労したようだが、その後は急流にも慣れ、いろいろと川で遊んだ様子も記してある。このように環境だけ見ても、まったく異なる世界で生活することになった沖縄の学童集団疎開は、1944（昭和19）年7月7日、政府の緊急閣議で決定した。

この日は、サイパン島で日本軍が玉砕。次の戦場が必至であった沖縄について、疎開はそれに備える形で急遽進められた。閣議決定で、沖縄本島、宮古島、八重山島から『老幼婦女子』を本土へ8万人、台湾へ2万人の計10万人を7月中に「引き揚げ」させることが決定した（帝国政府は沖縄から「本土」への移動を「疎開」とせず、「引き揚げ」や「引揚民」と称した）。対象となる『老幼婦女子』は、男性では60歳以上15歳以下であり、この範囲ではなくても障害者や病弱者も対象となった。また女性には年齢制限はなかったが、これは高齢者・幼児などの世話をするのに必要ということが事実上の前提であった。

一見すると人命優先の取り組みに見えるが、国家・軍にとっての直接の目的は、

- ① 戦争遂行に役立たない者は戦闘の邪魔となるため、島外へ退去させる
- ② 沖縄戦に備え増員される軍の食料確保のため、住民の人数を減らす

ということにあり、このため障害者や病弱者も疎開の対象になったという²。一方、疎開の話聞いた親たちは、家族離散の憂い、他県での生活の不慣れ、軍事協力をせず島を離れる心苦しき、米軍潜水艦が出没する海への航海などの不安で混乱。そのため当初、希望者は少なかったが学童たちは、疎開はわずかな期間だと聞かされていたこともあり、旅行気分のものや、「行ったことのないヤマトウ（本土）を見たい」と親の反対を押し切ったものもいた³。

結果的に、疎開は半強制的に進められ、第一陣が1944（昭和19）年8月14日、初の組織的学童集団疎開として潜水母艦「迅鯨」にて出発したのを皮切りに、次々に長崎港や鹿児島港を目指した。九州上陸後は汽車などで移動し、主要な学童疎開先は宮崎、熊本で、さらに必要があれば大分があたることになった。

宮崎県には32校2,643人、熊本県には28校2,602人、大分県には7校341人、計5,586人の学童が集団疎開した（図1）。受け入れ先はそれぞれ異なり、宮崎県では各国民学校、青年学校が主で58学校に沖縄県内32校が受け入れられ、熊本県では各地区の温泉旅館に28校、大分県では7校が寺院、公会堂で疎開生活を送った。

疎開先での暮らし

与那原国民学校の集団疎開を見ると、1944年8月21日、疎開学童ほか引率教諭、寮母、世話人ら119人が「和浦丸」に乗船、那覇港から九州に向けて出航した。この日出発した疎開船は、ほかに「対馬丸」と「暁空丸」。両側を二隻の軍艦が護衛した。しかし、対馬丸は戦時中の悲劇として知られるように、この航海で米国潜水艦の魚雷攻撃により沈没、学童・一般人1484人が亡くなった⁴。次はわが身かと魚雷攻撃に怯えながら、2隻が長崎港に到着したのは、出発してから4日目であった。

一行は長崎上陸後、汽車で疎開先の熊本県八代郡日奈久町（現・八代市）へと向かう。日奈久は八代市中心部から10kmほど南に位置し、古くから温泉街として知られる八代海に面した町である（図2）。学童たちは、駅前で町を挙げて歓迎され、旅館泉屋本店、同支店に分宿、疎開生活が始まった。

しかし、旅館の食料事情は厳しく、竹の食器に盛られるご飯は、はかりで一杯ずつ計量された。また、折しもその年の冬は、数十年ぶりといわれる寒波が疎開地を襲った。学童たちは「すぐに帰れる」と言われてきたため、防寒着の用意もない。初めて見る雪に歓声をあげたのもつかの間、霜焼けで手足が腫れたり、風邪で寝込む学童が続出した。

南国・沖縄の学童にとって、霜焼けは大変な問題であったらしく、熊本県北部、現在の山鹿市に疎開した別の疎開校では、霜焼けで足を切断する寸前の学童もいたという⁵。また、当時の授業について見ると、日奈久では近くの日奈久国民学校であり、国語と算数のみが行われ、授業の合間には体操のほか、皇居に向かい敬礼する「宮城遥拝」、「海行かば」斉唱などがあり、地域の清掃なども行われた。高等科の年長の児童は、農耕や坑木、炭俵の搬出、製塩作業などにも従事した。受け入れ先との交流に際しては、方言の心配もあったが、沖縄は厳しい標準語教育が行われていたため、受け入れ先のほうが学童たちの標準語のきれいさに驚いたようだ。

九州への疎開により、学童たちは苛烈な沖縄戦からは逃れられたものの、沖縄とはまったく異なる環境下

11
で、親元を離れ、食料も満足にない生活は「ヒーサン（寒い）、ヤーサン（ひもじい）、シカラーサン（寂しい）」という苦しい毎日であったという。

一方、戦局を見ると、年が明けても悪化するばかり。沖縄戦を目前にした1945（昭和20）年3月以降は、九州の主要都市や工業地帯は連日のように空襲の被害にあった。工場が並ぶ八代市中心部も4月、5月にB29爆撃機が立て続けに襲い、浅野セメントや日本セメントなどを爆撃、多数の死傷者が出た。

戦況悪化に対し、危険を避けるため熊本を疎開先としていた15校の学童らは、球磨川沿いの山間部へ移動。当時の八代郡上松求麻村（かみまつつくまむら）、下松求麻村と、葦北郡百済来村（くだらむら）に再疎開した（三村は戦後合併し坂本村に、2005年八代市と再合併）。

与那原国民学校の学童たちも6月15日、下松求麻村の西部国民学校に移動。宿舎は学校敷地内の施設で、旅館任せだった生活から自給自足の生活へと変わった。学童たちは運動場や球磨川べりの石ころだらけの荒地の開墾に専念、引率教諭や寮母らは、足を棒のようにして農家を回り、持参した着物などと引き換えにわずかな食料を手に入れた。村人らの差し入れもあったものの、集団を抜け出して食料浅いに徘徊する子供たちも後を絶たなかったという。また、学童はこの地で球磨川に触れたものが多く、冒頭で見た学童もここで球磨川横断に挑戦しており、自由時間には小川や球磨川で釣りをして遊び、ハゼをバケツいっぱい釣ったこともあったという。この再疎開直後、沖縄守備軍が壊滅。学童たちの故郷・沖縄は米軍の手に落ちた。日本が敗戦を迎えた8月15日には、一行が与那原を後にしてから1年が経っていた。しかし、帰郷のめどすらたないまま時が過ぎ、沖縄を離れ三度目の夏を迎えた1946（昭和21）年8月、ようやく帰還命令が下る。

与那原の学童が、長崎・佐世保経由で沖縄に帰還したのは10月25日。しかし、恋焦がれた故郷・沖縄は、「鉄の暴風」と呼ばれる地形が変わるほどの激しい艦砲射撃を受け、焦土と化していた。沖縄出身の軍人と、陥落後に病・餓死した民間人を含めると、県民の死者は約15万人。全県民の25%、4人に1人が戦争で亡くなり、両親や兄弟が犠牲となり、疎開の別れが永遠の別れとなってしまった学童も少なくなかった。現在、疎開していた学童の多くは、80歳を超える立派なおじいとおばあ。いまは彼らから、血の通った当時の話を聞ける最後のチャンスかもしれない。

【文献】

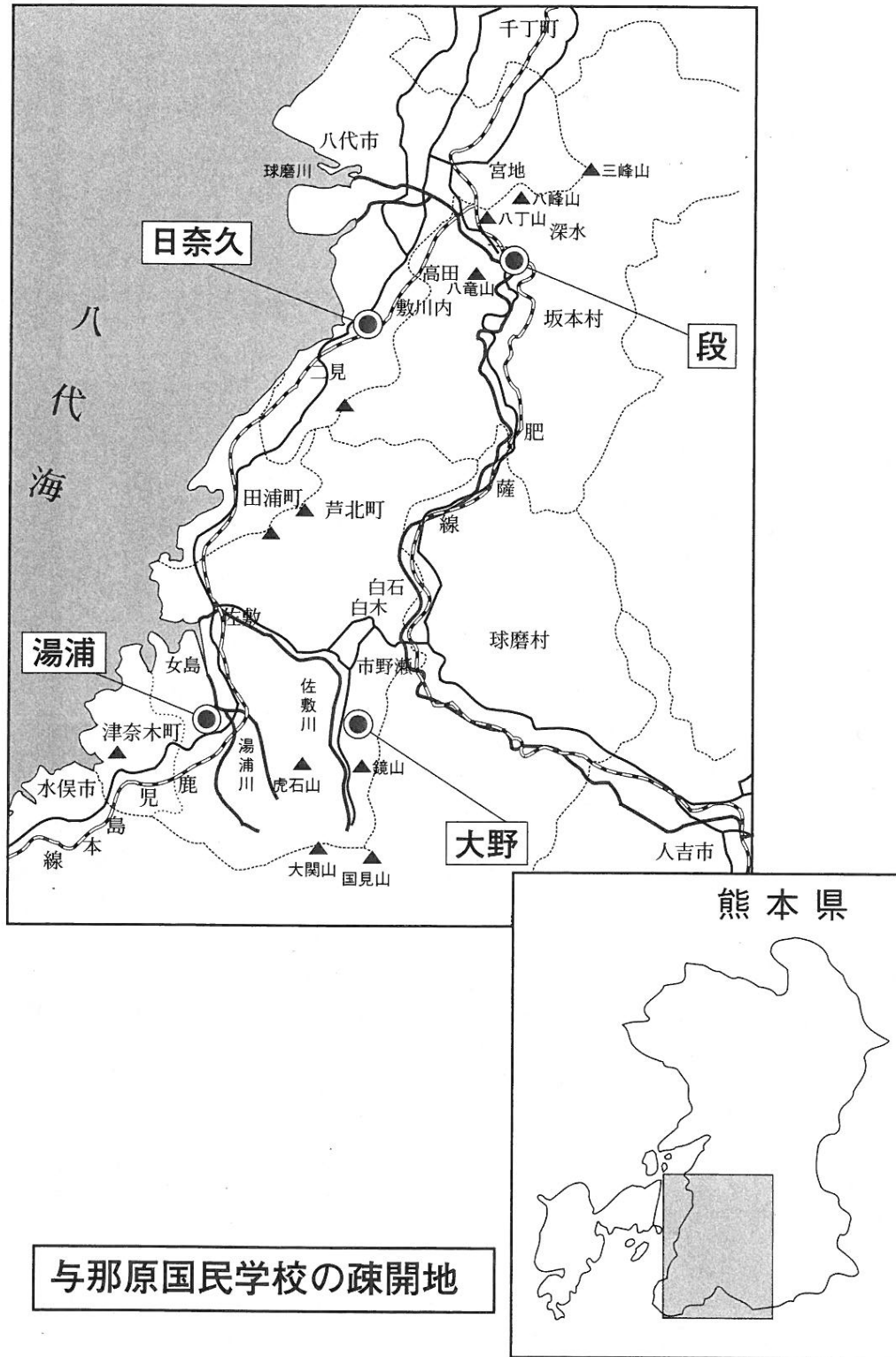
- 1 与那原町学童疎開史編集委員会（1995）与那原の学童集団疎開第一部体験集「ムギメシヒトツ ココフタツ」.与那原町教育委員会. pp.93
- 2 前掲 与那原の学童集団疎開第一部. pp.16
- 3 琉球新報編集局学童疎開取材班（1995）沖縄・学童たちの疎開.琉球新報社. pp.61
- 4 當間栄安（2004）対馬丸遭難の真相.琉球新報社.pp.39
- 5 前掲 沖縄・学童たちの疎開. pp.77

沖縄県学童疎開配置図



注・疎開学童数は1944年10月1日現在の県まとめ。受け入れ先は現在の市町村名。熊本、宮崎県は現地調査などで一部修正した。熊本、宮崎県では1945年6月ごろから、空襲を避け、より山間部へ移動した。

図1 沖縄県学童疎開配置図／琉球信奉編集局学童疎開取材班（1995）沖縄・学童たちの疎開.琉球新報社. pp.12



与那原国民学校の疎開地

図2 与那原国民学校の疎開地／与那原町学童疎開史編集委員会（1995）与那原の学童集団疎開第一部体験集「ムギメシヒトツ ココフタツ」.与那原町教育委員会. pp.21

八代海沿岸の地名④ 麓（ふもと）と古麓（ふるふもと）

佐藤伸二

球磨川と水無川とに挟まれた丘陵部の裾あたりが、八代市古麓町、江戸時代の古麓村である。丘陵上には山城があった。中世の八代城で、春光寺の門前あたりに登り口があったと推定されている。

麓地名について調べたことがある。語源的には「ふみもと（踏元・踏本）」で、坂の登り口を意味していたと考えられている。山の裾を意味する単なる地形地名ではない。

南九州では中世（戦国時代）の山城の登り口に形成された武家集落を麓と言った。近世（江戸時代）になっても、島津藩には中世の流れをくむ外城制度があった。外城は数ヶ村からなっていて、その中心となる村（武士集落）を麓と言った。出水市の麓はその代表で現在でも武家屋敷が整然と並んでいる。麓地名が鹿児島県下に多いのはそのためである。

宮崎県・熊本県の南部にある麓地名は戦国時代以来の地名と考えている。人吉市大畑麓町の麓・あさぎり町上村の麓など、八代市の古麓町もその一つであるが、なぜか古麓である。その理由を明確に説明したものには接していないので、私なりの考えを述べておく。

まず、戦国時代以降の八代の歴史を簡潔に説明しておこう。球磨郡を統一した相良氏は葦北郡も支配下に入れ、八代にも進出してきた。八代を治めていた名和氏は敗れ、本拠地を宇土に移した。宇土市の西岡台（中世宇土城）である。八代を手に入れた相良氏は、ここを本拠地として球磨・葦北・八代の3郡を支配し、海外貿易も行ったので八代は繁栄した。

やがて、島津氏が大隅・薩摩の支配を固め、北上をはじめた。その軍門に降った相良氏は、阿蘇氏の勢力と響ヶ原（宇城市豊野町）で戦い、敗北したので球磨郡に帰った。その後、島津氏は八代を拠点の1つとして、北上を続けたが、豊臣秀吉の九州平定の際に八代を離れた。秀吉から宇土・益城・八代などを与えられた小西行長は球磨川河口部の麦島に八代城（麦島城）を築いたので、八代の中心はそこに移った。

関ヶ原の戦いの後、加藤清正の領地となり、江戸幕府による元和元年（1615）の一国一城令の後も存続した。元和5年3月の大地震により崩壊すると、幕府の許可を得て球磨川対岸の松江・徳淵の地に八代城（松江城）が築かれた。加藤氏改易後は細川氏に、さらに筆頭家老の松井氏に受け継がれた。

以上の様な八代の歴史の中に古麓を位置付けることにする。山城の登り口の武家屋敷群を麓と言ったのは相良氏と島津氏である。名和氏は、宇土城の周辺に麓地名がないので、麓と言わなかったようである。小西氏も麦島城が完成するまでは山城を利用したと思われるが、当時の一般的な状況から考えて、城下・城下町と呼んだのではないだろうか。

たぶん相良氏の時代の麓の近くに島津氏が新たに麓を作ったので、相良氏の時代の麓を古麓と呼ぶようになった。これが江戸時代の古麓村になったのではないだろうか。ちなみに古麓町の小字地名に「新城（シンジョウ）」がある。この新城は島津氏の時代に築かれた山城に由来する地名ではないかと考えている。今後の調査に期待している。



← 八代市古麓町（正面が春光寺境内）

八代市古麓町の公民館付近。
相良氏時代の城下町跡の標柱がある →



← 麦島城跡（八代市古城町）
古城はフルシロと読む

多良木町の扇状地の災害地名と夜叉五倍子（ヤシャブシ）

たらぎ地名研究会 久保田 貴紀

私の本業である建築設計では、土地を読むことが重要です。その手がかりとして地名が非常に有効であり、その中でも特に災害地名は建築設計に最も関わりが深いいため、多良木町の災害地名について調べています。

図1は、昭和43年作成の多良木町の最も古い字界図に河川を描き入れたもので、町の境界線が分水嶺である槻木峠を越えて南側に広がっています。東から西に向かって球磨川が流れ、右岸は河岸段丘、左岸は槻木峠から緩やかに下る扇状地となっています。

遠藤宏之著『地名は災害を警告する』（技術評論社、2013年1月）巻末の災害地名の分類を参考にして、字界図から町内の災害地名を拾い出した結果、多良木町に多い災害地名は崩壊地名・水害地名のツル（19種類・22カ所）、崩壊地名のヒラ（17種類・17カ所）、崩壊地名・水害地名のサコ（11種類・11カ所）、崩壊地名・水害地名のアカ（8種類・12カ所）、水害地名のクボ（8種類・8カ所）で、特にツル・ヒラが扇状地に多い傾向が見られました。

町の建築物耐震改修促進計画によると、扇状地中央に走る人吉盆地南縁断層によって長期周期で起こりうる最大マグニチュード7.1規模の地震では、この扇状地の広範囲で震度5強の揺れが予測されています。図2は、災害地名と災害履歴（土砂災害警戒区域および災害工事台帳による）、人吉盆地南縁断層による震度予測を重ねたものです。近年は球磨川右岸と槻木峠以南の山間部で災害が多く、土砂災害警戒区域の指定等もあることから、この地区の住民の危機意識は高いと言えます。一方で、球磨川左岸の扇状地は、短期的に見れば災害が少なく、また中心市街地は明治22年（1889）以降に形成され、大きな災害の経験が少ないために、強い震度が予測されているにもかかわらず住民の危機意識は低いと言わざるを得ません。

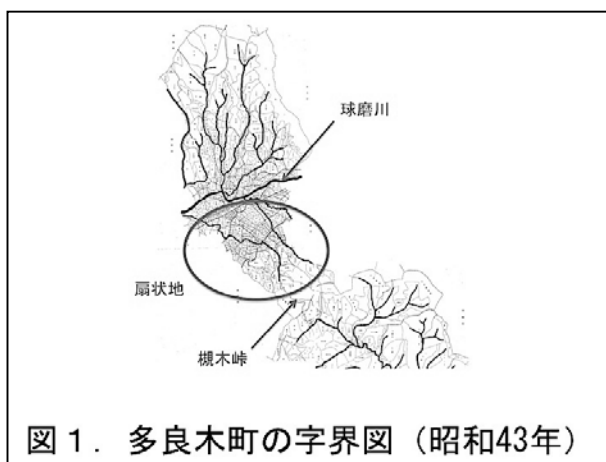


図1. 多良木町の字界図（昭和43年）

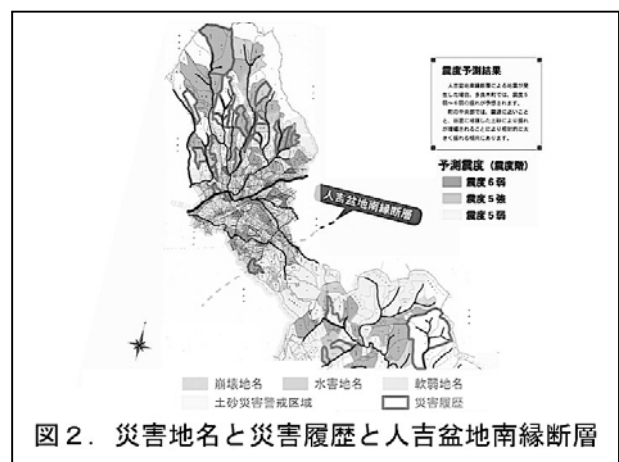


図2. 災害地名と災害履歴と人吉盆地南縁断層

住民への注意喚起という点で、昨年度 11 月に開催した町民文化祭での研究報告会は大変意義がありました。会員以外の町民の関心も高く、聴衆からも昭和 29 年の水害など扇状地の災害の記憶が掘り起こされるような体験談が多く出されました。その中でも、扇状地を流れる仁原川上流に植えられている夜叉五倍子（ヤシャブシ）という樹種が興味を惹きました。

カバノキ科ハンノキ属の落葉高木である夜叉五倍子は、根に共生する根粒菌のおかげで痩せた土でも良く生育し、松など他の樹種との混植による緑化に適しているために古くから崩壊地や法面に植樹されてきました。また、松より一回り小さい果穂（写真 1）はタンニンを多く含み、顔料として利用されてきました。

昨年 12 月に、町内の中山観音・聖観世音菩薩立像（熊本県指定重要文化財、写真 2）を修復中であった福岡県糸島市の浦仏刻所を町の文化財保護委員で訪ねた際、仏像の補修材を古材と調色するために化学染料ではなく、この夜叉五倍子を煎じて利用しているとの説明を受けました。夜叉五倍子は単に調色だけではなく、撥水性を高めて木質を強化する効果もあるそうです。

災害地名の調査と文化財の保護活動が、たまたま一つの樹種で繋がったことに因縁めいたものを感じた次第です。

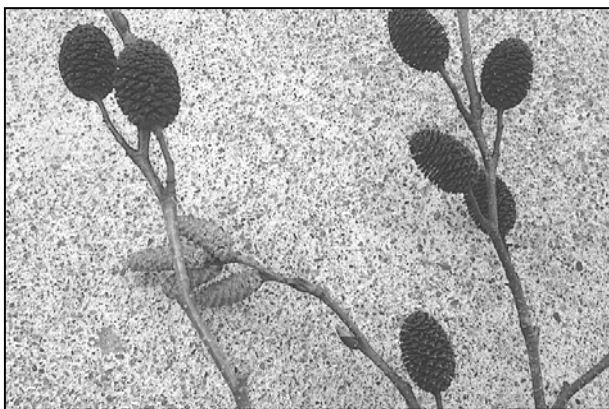


写真 1. 夜叉五倍子（ヤシャブシ）の果穂



写真 2. 木造観世音菩薩立像（県指定）

「不知火海・球磨川流域圏学会 学会誌 原稿募集！（随時）」

—みなさんの、地域への熱い想い、愛着を学会誌に載せてみませんか—

学会では、会則に定められた学会誌を発行するため、下記の内容で原稿を募集いたします。専門家に限らず一般市民の方や農林水産業に従事されている方々、行政の方々から、学際的な情報を広く掲載し、紹介していきたいと考えていますので、よろしくお願いいたします。

1. 原稿の種類

募集する原稿は、以下の4種類です。

1) 原著論文

広くみなさんから、論文を募集します。流域圏に少しでも関係するものであれば、どのような研究領域の論文でも構いません。ご投稿いただいた原稿は、専門家や地域の事情に詳しい方に査読を依頼し、編集委員会で採否を決定いたします。なお、本学会誌は高校生でも読めるものを目指していますので、専門用語には必ずわかりやすい解説をつけてください。

2) 研究ノート、調査資料、記録

愛する地元＝流域圏に関して、資料を集めている方はいませんか？積み重ねた知識を文章に残しませんか？論文の形には至らなくても、あなたの探究心は流域のみなさんにとっても価値あることに違いありません。たとえば、自然・歴史・社会などの調査報告、観察記録、資料として未来に残したい情報などです。活発な探究心と知識の共有は、流域の未来の礎となることでしょう！小中学生、高校生からのクラブ活動や自由研究の紹介も大歓迎です。

3) 流域いろいろ

研究に限らず、流域への想い・エッセイ、イベント情報など、流域のみなさんに知ってほしいこと・お伝えしたいことはこちらにどうぞ。有形 無形の流域の宝物を探し出し、みなさんと分かち合いましょ！「こんな研究して欲しいなあ〜」という要望なども是非お寄せください。

4) コラム欄

分量は1ページから半ページの間（800～1600字）で、自己紹介、エッセイその他をお寄せください。図表写真は1枚だけ掲載可能です。ニュースレターに掲載するには字数が多すぎる、ニュースレターにすでに載ったが書き直して学会誌にも載せたい、というようなご希望も歓迎いたします。タイトル、著者名を明記してください。原稿の採否は編集委員会が決定します。

2. 発行予定 毎年4月末日。諸事情により変更される可能性があります。

3. 締切り 例年11月ごろ（変更される場合がありますので、お問い合わせください）

4. 投稿方法

投稿を希望される方は、まず編集委員長に電話やメールでご相談ください。

原稿の形式は、学会誌創刊号に準じますが、引用文献の記載法など、細かい点については、追ってお知らせいたします。完成した原稿は、投稿整理票に必要事項を記入の上、原稿とともにメールまたは郵送で編集委員長宛にお送りください。手書き原稿も歓迎します。

5. 送り先、問い合わせ先

編集委員長 高木正博 〒889-1702 宮崎市田野町乙 11300 宮崎大学農学部附属田野フィールド（演習林） tel: 0985-86-0036, fax: 0985-86-2551, e-mail: mtakagi@cc.miyazaki-u.ac.jp

不知火海・球磨川流域圏学会は、私たちでつくる、私たちのための学会です。皆さんからの熱い想いが投稿されることを、編集委員会委員一同、お待ちしております！

（編集委員会）

— 学会誌への広告募集中 —

企業・商店・個人・サークルなど、分野を問いません。10 cm×7 cm（A4の1/8サイズ）5,000円、（A4全面40,000円）。応募先は上記学会誌原稿の問合せ先まで。※公序良俗を乱し、学会誌の相応しくないと判断された場合はお断りする場合があります。

「不知火海・球磨川流域圏学会誌」販売

■最新号 vol. 7 No. 1 (2013年) 1,000円

- 【原著論文】HEPを用いたダム撤去事業における定量的影響評価 …… 八木裕人・つる詳子・田中章
球磨川河口域の金剛干拓地先の砂質干潟におけるアサリの棲息を制限する要因
…………… 堤裕昭・小川純一・小森田智大
- 【研究ノート】タケにおける節の役割 …………… 井上昭夫・柄原志保莉・北里春香
八代海におけるクロツラヘラサギ(*Plataelea minor*)の越冬状況 …………… 高野茂樹
底質硬度とアサリ資源量の関係
原口浩一・一宮睦雄・徳永吉宏・大拙英治・宮崎孝・森下惟一・岩田継安昭・北園善基・八里政夫
- 【流域いろいろ】交通路としての球磨川—人吉八代ルート— …………… 上村雄一
「干潟生物の市民調査」研修会で育成した人材による八代海ベントス相調査の実施
…………… 中川雅博・佐々木美貴・つる詳子・高野茂樹
- 【記録】日本発のダム撤去の現場からの報告—荒瀬ダムのこの1年 …………… つる詳子
東日本震災被災農地復興に向けて …………… 深田正博
- 【平成24年度研究発表会記録】基調講演 種山石工の活動 …………… 上塚尚孝

■vol. 4～vol. 6 について

vol. 6 (2012年) 800円

【研究ノート】宮崎の海岸林と砂丘と砂浜／八代の干潟の底生生物の特性について／ポート上からアマモ苗、栄養株を移植するための植栽機の開発

【流域いろいろ】八代海での「干潟生物の市民調査」研修会の実施と干潟調査ができる人材づくり／写真でつづる昭和の八代—麦島勝写真集より—／地域資源を活用した五木型ツーリズムの展望

【記録】荒瀬ダムに関する資料分析／日本発のダム撤去の現場からの報告—荒瀬ダムの1年

【平成23年度研究発表会記録】八代地方の干拓のあゆみ概観

【学会記事】会則／役員名簿／活動記録

【ニューズレターNo.2】

vol. 5 (2011年) 800円

【総説】海藻中の機能性成分とその有効利用

【原著論文】球磨川流量と八代海北部の鉛直循環流量の関係

【記録】日本発のダム撤去の現場からの報告—荒瀬ダムの1年

【平成21年度研究発表会記録】五木村での取材を通じて／九折瀬洞窟の調査報告／森林の社会的価値の変化を踏まえた人工林の未来可能性／新発見「五木村庄屋元文書」の価値

vol. 4 (2010年) 500円

【巻頭講演記録】国宝に指定された青井阿蘇神社

【研究報告】人吉におけるダムの疑義～市民によるダム反対運動が始まるまで

【研究ノート】荒瀬ダム撤去と水保病の共通点—流域圏再生の視座から—

【調査資料】熊本県南部の湧水に見られるオキチモズク

【流域いろいろ】焼酎よもやま話/親鸞聖人木像と隠れ念仏

※vol. 2, vol. 3 の在庫もあります。

※創刊号 vol. 1 について…CD販売のみです(800円)

内容は、facebookグループ「不知火海・球磨川流域圏学会アーカイブ」参照下さい

■申込み方法：下記宛に必要な部数、お名前、ご住所、送り先をお知らせ下さい。

・E-mail：tsuru.shoko@gmail.com (総務:つる詳子)

・facebook ページ「不知火海・球磨川流域圏学会」<https://www.facebook.com/shiranuikuma> のメッセージ欄

※10冊以上は、割引サービスがあります。

■お願い：図書館や公民館など学会誌を購入して下さるところをご紹介下さい。

■不知火海・球磨川流域圏学会ニューズレター 第16号

編集：発行/不知火海・球磨川流域圏学会